

機関番号：32627

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520178

研究課題名（和文） 三島由紀夫の手稿に関する総合的研究

研究課題名（英文） A comprehensive study of Mishima Yukio's manuscripts

研究代表者

井上 隆史（INOUE TAKASHI）

白百合女子大学・文学部・教授

研究者番号：10251381

研究成果の概要（和文）：

三島由紀夫の手稿類（創作ノート、下書き原稿、ゲラへの書き込み、書簡など）を調査すると同時に、二葉亭四迷、宮沢賢治など三島以外の作家の手稿研究の従来成果や問題点について検証した。そして、フランスの生成論について検討、哲学（解釈学）や美術史の議論も取り込んで、より望ましい手稿研究の方法論を探った。

これを踏まえ、三島の代表作「金閣寺」や遺作四部作「豊饒の海」の創作ノートを研究し、後者に関しては、創作ノートで検討されていたが、その後大きく変更された第四巻の当初の構想を発展させ、「幻の第四巻」を仮構した。

研究成果の概要（英文）：

My research focuses on Yukio Mishima's manuscripts (draft notes, original drafts, proofs, and letters, etc.) as well as those of other writers, including Miyazawa Kenji and Futabatei Shimei.

I am also interested in French literary genetics, philosophy (hermeneutics) and art history because they offer fascinating perspective and methods with regard to manuscript study.

I have thus examined draft notes of Mishima's most important work Kinkakuji and of his four posthumous works Hojo-no-Umi.

As far as the latter is concerned, I developed the plot and the concept of the fourth book as it was designed in the draft notes - which differ greatly from the published version - and tried to create an alternative "fourth book".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学・

キーワード：国文学、文学論

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1999年（平成11年）に開館した三島

由紀夫文学館には多数の手稿資料が収められ、これに基づいて「決定版三島由紀夫全集」

(全 42 巻+補巻+別巻、2000~2006、新潮社)が刊行された。本研究代表者は文学館研究員として、また「決定版三島由紀夫全集」の編集協力者として手稿の調査研究および活字化にあたったが、その過程で、わが国においては手稿研究の方法と目的に関して、多くの課題が十分に検討されることのないまま残されていることを認識した。

(2)そこで、三島の手稿という具体的資料を主たる対象にしなが、手稿研究全般における課題を一つずつ考察してゆこうと考えるに至った。

## 2. 研究の目的

(1)本研究は、三島由紀夫の手稿を中心に、さらに国内外における三島以外の文学者(二葉亭四迷、夏目漱石、横光利一、宮沢賢治、武田泰淳、野間宏、フローベール、プルーストなど)の手稿についても、従来の研究成果や今後問われるべき課題について検討し、近代文学研究における、より望ましい手稿研究の方法論を探ろうとするものである。

(2)その方法論に基づいて、三島由紀夫の文学作品の創作過程やテーマ、構造などを分析する。加えて三島の伝記的事実や文学史上の意義などについても、従来言われていたことを超えた、新たな知見を得ようとするものである。

## 3. 研究の方法

(1)本研究以前から行っていた三島由紀夫文学館所蔵の手稿の調査、翻刻を、引き続き行う。

(2)二葉亭四迷、夏目漱石、横光利一、宮沢賢治、武田泰淳、野間宏、フローベール、プルーストらの手稿について各専門領域の研究者や、国内外の図書館、フランスの近代テキスト草稿研究所 (ITEM) など関連機関と連絡をとるなどして、資料収集、調査研究を進める。

(3)ピーター・シリングスバーグ、ディルク・ファン・ヒュレらによる編集文学学のほか、ハンス＝ゲオルク・ガダマー、E.D.Hirsch, Jr.らの解釈学や美術史など他領域に関しても、それらが手稿研究の方法の発展に大いに寄与するところがあると考えられるため、各専門領域の研究者と連絡を取るなどして研究を進める。

(4) (2) (3) に関しては、「文学」2010年9・10月号の特集「草稿の時代」をコーデ

ィネートし、多領域の研究者と連携する場として多くの寄稿を得た。「文学」当該号の内容については、以下のサイトを参照。  
<http://www.iwanami.co.jp/bungaku/>

## 4. 研究成果

(1)手稿研究の方法をもっとも精緻に理論化したのはフランスの生成論だが、そこでは草稿(手稿)の自律性が過度に強調され、特に決定稿(と呼ばれるもの)と手稿とを結びつけて論じることが、研究方法として誤りであるかのような主張が唱えられている。しかしながら、手稿研究を稔りあるものとして発展させるためには、手稿を、いわゆる決定稿を含む当該作家の別テキストと比較対照する営みが不可欠であり、その場合、各々の手稿と、比較対象となるテキストとの間には、解釈学的循環に似た構造が認められることを、はじめて明らかにした。

(2)一般には、手稿研究が作品の解釈に変化をもたらす可能性や、作家の意図を作品解釈に持ち込むことに対する否定的ないし消極的な見解が強い(反意図主義)。しかしながら、手稿研究によって作家の意図の一端が明らかになり、その結果、従来の解釈に変化がもたらされることに正当な理由があることを、はじめて明らかにした(以上、下記論文「なぜ草稿を読むのか、どのように草稿を読むのか」)。

(3) (1) (2)を踏まえ、三島由紀夫の「金閣寺」「英霊の声」や「豊饒の海」などの手稿、特に「豊饒の海」の創作ノートについて詳細に分析した。その際、「豊饒の海」と唯識との関わりについても考察を進めたが、その結果、①「豊饒の海」の根底的な筋立て(プロット)を、「虚無と救済の闘争」とまとめることが出来ること、②それは同時に「豊饒の海」の最も根底的な主題でもあること、③実際に発表された「豊饒の海」第四巻(最終巻)では、この闘争は「救済」の敗北に終わるが、創作ノートで検討された当初の構想では「救済」の勝利が予定されていたこと、などが明らかになった。

(4)創作ノートで検討されていた「豊饒の海」第四巻の構想、すなわち「救済」の勝利に終わる構想を発展させ、「幻の第四巻」を仮構した。その結果、①当初三島は「豊饒の海」を、世界文学史上において見たときプルーストの「失われた時を求めて」やジョイスの「ユリシーズ」がそうであるような全体小説の系譜に連なるものとして書きあげようと意図していたこと、②その意図が最終的に三島自身によって否定され、「虚無と救済の闘争」が「救済」の敗北に終わるに至ったことは、昭和の精神史の直接的な反映でもあること、などが明らかになった。これらは、従来の三島研

究を越えた、新たな成果である(以上、下記図書「三島由紀夫 幻の遺作を読む—もう一つの『豊饒の海』」)。

(5)「豊饒の海」に関する上記以外の成果として、佐藤秀明氏、工藤正義氏とともに「豊饒の海」創作ノートの未発表部分(「決定版三島由紀夫全集」未翻刻箇所)を活字化し、「三島由紀夫研究」6～10(2008～2010、鼎書房)に掲載した。その詳細は以下のである(等号の右辺は創作ノートの名称。ただし、このうち「奔馬 三島由紀夫」の翻刻には本研究代表者不参加)。

- ・「三島由紀夫研究」6  
＝「大長篇ノオト(尼寺)」
- ・「三島由紀夫研究」7  
＝「奔馬 三島由紀夫」
- ・「三島由紀夫研究」8  
＝「奔馬(刑務所)」
- ・「三島由紀夫研究」9  
＝「大神神社」
- ・「三島由紀夫研究」10  
＝「暁の寺」

なおこの翻刻は、2011年以降も継続し、今夏刊行の「三島由紀夫研究」11には「バンコック取材」の翻刻を掲載する予定である。

(6)「金閣寺」に関しては、創作ノートを詳細に分析し、その内容を主題、構成、筋立、取材、着想、断片の6カテゴリーに分類した。その上で、このノートを活字化した「決定版三島由紀夫全集6」のページ数、行数と対応させる一覧表を作成した。

(7)これを踏まえて「金閣寺」の主題や構造の問題を再検討した。特に想像力の問題については、カントからガルシア＝マルケスに至るまでの世界思想史、世界文学史の広い文脈の中に「金閣寺」を位置づけることを試みた。その結果、「金閣寺」においては、近代における想像力論が原理的に内包していた問題(想像力の展開が虚無に帰着するという問題)が極点まで突き詰められ、そのことによって近代という時代そのものが照射されていることが明らかになった(以上、下記論文「『金閣寺』論—想像力の問題」)。

(8)「英霊の声」に関しては、これをその原型である手稿「悪臣の歌」と比較対照し、作品構造やテーマについて分析した。また、「悪臣の歌」を活字化した「決定版三島由紀夫全集20」に即して、その内容構成に関する一覧表を作成した(下記論文「『英霊の声』と『悪臣の歌』」)。

(9)その他の成果として、三島の中村真一郎宛未発送書簡を取り上げながら、戦後文学

において、それぞれの方法において全体小説の執筆を試みた三島と中村の文学を比較検討した(下記論文「中村真一郎と三島由紀夫」)。

(10)三島の小説「禁色」の創作ノートを取り上げ、これを日本近代文学館蔵の武田泰淳の手稿、神奈川近代文学館蔵の野間宏の手稿などと比較検討しながら、戦後作家たちの全体小説に対する問題意識を考察した(下記論文「三島由紀夫というプリズム」に一部反映)。

(11)三島の小説「美しい星」の創作ノートを取り上げ、「美しい星」と埼玉という地域との関係について考察した(下記講演「没後40年の三島由紀夫」)。

(12)美術史家の宮下規久朗氏とともに三島由紀夫と美術との関わりについて考察したなかで、三島自身が描いたスケッチ、舞台装置図などについても、広い意味での手稿の一種として検討した(下記図書「三島由紀夫の愛した美術」)。

(13)アートシアター新宿文化の支配人として三島と交流のあった葛井欣士郎氏と座談会を行い、葛井氏の所持している三島の手稿類(「決定版三島由紀夫全集」未収録)について検討した(下記座談会「アートシアターと三島由紀夫—葛井欣士郎氏を囲んで—」)。

(14)なお、(1)で触れたように本研究代表者はフランス生成論に対して批判的な立場に立つが、生成論に多くの学ぶべき点があることも確かである。そこで、生成論の代表文献の一つである Pierre-Marc de Biasi の *La génétique des textes* の翻訳を、現在進めている(下記論文「なぜ草稿を読むのか、どのように草稿を読むのか」に一部反映)。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

①井上隆史、中村真一郎と三島由紀夫、中村真一郎手帖6、査読なし(依頼原稿)、2011、2～7ページ

②井上隆史、三島由紀夫というプリズム、解釈と鑑賞4月号、査読なし(依頼原稿)、2011、11～17ページ

③井上隆史、なぜ草稿を読むのか、どのように草稿を読むのか、文学9・10月号、査読なし、2010、63～72ページ

④井上隆史（司会）・松澤和宏・十川信介・十重田裕一・栗原敦、座談会 草稿の時代、文学9・10月号、査読なし、2010、2～49 ページ

⑤井関麻帆、ルソーと『告白』の草稿—幼年期における記述をめぐって—、文学9・10月号、査読なし（依頼原稿）、2010、218～224 ページ

⑥井上隆史、「英霊の声」と「悪臣の歌」、三島由紀夫研究8、査読無し、2009、60～66 ページ

⑦井上隆史、三島由紀夫と仏教、解釈と鑑賞2月号、査読無し（依頼原稿）、2009、74～79 ページ

⑧葛井欣士郎・井上隆史・松本徹・山中剛史、座談会 アートシアターと三島由紀夫—葛井欣士郎氏を囲んで—、三島由紀夫研究7、査読無し、2009、90～116 ページ

⑨井上隆史、『金閣寺』論—想像力の問題、三島由紀夫研究6、査読無し、2008、40～62 ページ

〔学会発表〕（計4件）

①講演、井上隆史、「もう一つあった『豊饒の海』のストーリー」、三島由紀夫研究会、2011年2月25日、アルカディア市ヶ谷

②講演、井上隆史、「人類の知の遺産 三島由紀夫」、東京自由大学、2010年11月20日、東京自由大学

③講演、井上隆史、「没後40年の三島由紀夫」、さいたま文学館、2010年9月24日、さいたま文学館

〔図書〕（計4件）

①松本徹、佐藤秀明、井上隆史、山中剛史編、鼎書房、「同時代の証言 三島由紀夫」、2011、449 ページ

②井上隆史、光文社、「三島由紀夫 幻の遺作を読む—もう一つの『豊饒の海』」、2010、262 ページ

③井上隆史・宮下規久朗、新潮社、「三島由紀夫の愛した美術」、2010、127 ページ

④井上隆史、新典社、「三島由紀夫 豊饒なる仮面」、2009、252 ページ

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井上 隆史 (INOUE TAKASHI)  
白百合女子大学・文学部・教授  
研究者番号：10251381

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

山中 剛史 (日本大学ほか非常勤講師)  
TAILLANDIER Denis (立命館大学講師)  
井関 麻帆 (パリ第7大学博士課程)  
田中 真夕美  
(白百合女子大学非常勤講師)